
屋根裏部屋から異世界へ

夏梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋根裏部屋から異世界へ

【Nコード】

N5748P

【作者名】

夏梅

【あらすじ】

十四歳の誕生日、紗由は屋根裏部屋で美しい鍵を見つける。どうやら、その鍵は屋根裏部屋にある扉の向こうの世界から来たようである。

なぜか自分の世界に帰れなくなってしまった紗由は、向こうの世界で見つけた指輪に入っていた妖精（猫）のメルをお供につれて鍵の秘密を探っていく。

*凍結します。

1 秘密の鍵（前書き）

中一のころに途中まで書いた小説を、少し書き直したものです。
良かったら、感想をお願いします。

1 秘密の鍵

紗由は古い鍵を錠へと差し込んだ。かちりと音がしてようやく錠が開き、扉を力いっぱい引くと重くきしんだ音が辺りに響いた。

すぐ目の前にあった急な階段は、屋根裏部屋に続いていた。縁側の明るさとは対照的に、階段は不気味なほど静かで暗い。紗由は階段をしばらく見つめていたが、ためらいがちにそと階段を上り始めた。

紗由の祖父は大工で、十数年ほど前に何を思ったのか、急に屋根裏部屋を造りはじめた。不思議がる家族をよそに、祖父は部屋を完成させると錠をおろして誰も入れないようにした。

その後、祖父は紗由が五歳の時に他界し、祖父が亡くなる少し前に紗由は鍵と部屋を譲り受けたのだ。兄はどうして紗由が、と文句を言っていたが、紗由は自分が一番可愛がられていたからだ、ひそかに思っている。

実は、紗由は今日までこの鍵のことをすっかり忘れていた。部屋の整頓をしていた時に、棚の奥から鍵が転がり出てきて、紗由はやっと屋根裏部屋が存在を思い出したのだ。

そして、十四歳になった今日、紗由は部屋に入ろうと決めた。

屋根裏部屋に足を踏み込んだ紗由は、中が意外と明るいことに気づいた。六畳ほどの広さで、小窓からは朝日が差し込んでいる。埃が床に積もっている以外、何もない殺風景な部屋だった。

一歩踏み出す度に埃が舞い上がり、紗由は咳き込んだ。たてつけ

の悪い小窓を開けると、新鮮な空気が部屋に流れ込む。部屋の中を漂う埃が外に向かって移動し始めた。

ふと、紗由は部屋の隅に小さな宝石箱が置いてあるのを見つけた。汚れはあったが、動物の彫刻が施されていて、とても高価なものだと分かる。

「何が入ってるんだろ」

持ち上げてみるとけっこう軽い。興味を持った紗由はかぶっていた埃を軽く払うと、宝石箱を開けてみた。

あっさりと開いたことに驚きつつ中を見ると、六センチほどの鍵が入っている。鍵には翡翠がはめこまれており、日光に反射して緑色に輝いていた。手に持つと、冷たい感触が伝わってくる。紗由は鍵の美しさに惹かれ、自分が鍵に魅入られていることにもしばらく気がつかなかった。

その時、下で玄関の扉を開ける音がした。夜勤の父が帰ってきたのだろうか。

紗由は慌てて鍵をポケットにすべりこませ、階段を駆け下りると扉の錠をおろした。なんとなく、部屋に誰も入ってほしくなかったのだ。

「持って行っちゃった・・・」

誰もいなくなった屋根裏部屋に、呆然としたような少女のつぶやく声が響いた。

2 小さな扉

夜になり、汚れた鍵を磨いているとふつと疑問が湧いてきた。どうして、あの部屋にあんな高価そうな宝箱が置いてあったのか。祖父が置いたものののだろうか。隠していたのなら、なぜ言ってくれなかったのか……。考えれば考えるほど、疑問は出てくる。紗由には宝箱が隠してあった理由が分からなかった。それほど、大事なのもかもしれない。

鍵は磨き終わると、見つけたときよりも更に輝きを増していた。紗由はしばし考えた末、鍵を枕の下に隠すと、眠りについた。

紗由は気がつくと、屋根裏部屋に立っていた。紗由はしばらくぼんやりと突っ立っていたが、ふと我に返ってきよろくと周りを見回した。ここは——屋根裏部屋だ。

「あれ？どうしてここに……」

困惑した紗由は部屋を歩き回ってみた。さっき入った時と特に変わりはない。だが、自分はベッドで寝ていたはずだった。夢でも見ているのだろうか？

「私があなを夢から呼び出したの。鍵をどこに隠したの？」

突然、聞いたことのない少女の声が部屋に響いた。紗由は驚いて後ずさった。部屋には紗由のほかに誰もいない。部屋に沈黙が流れる。紗由はこくりと息を呑むと、意を決してその声に尋ね返した。

「だ、誰？どこにいるの？」

「それは秘密。あなたには質問に答えてもらいたいの。鍵はどこ？」

少女の声は優しくだったが、微かに敵意が込められていることに紗由は気づいた。紗由はとっさに本当の事を言った方がいいと感じ、素直に答える。

「私のベッドの枕の下だけど……。でも、何で鍵のことを知っているの？」

あの鍵のことは、きっと祖父以外誰も知らなかったはずだ。それに、この部屋には作られて以来、自分と祖父以外誰も入っていないはず……。

一瞬、少女の気配が消えた。が、すぐに少女の笑い声が返事とともに聞こえてきた。

「あの鍵はね、私の世界のもののなの。数十年前、ここにいた少年に預けたんだけど、それも今日で終わりね」

その言葉が理解出来なかった紗由は、思わず顔をしかめた。こんなおかしい夢を見たのは生まれて初めてだ。

突然、部屋の隅に小さな扉が現れた。そして、扉はひとりで開き、軽い音を立てて閉じられた。紗由はあわてて扉に近づいてみたが、急に目の前が暗闇に包まれ、何も見えなくなってしまった。

鳥のさえずり声と、眩しい朝日で紗由は目を覚ました。紗由はその眩しさにまた目を閉じる。しばらくの間、ぼんやりする寝起きの頭でさきほど見た夢を思い出していると、鍵や少女のことが頭に浮

かんできた。紗由は弾かれたように飛び起き、枕を持ち上げて確認する。案の定、鍵は無くなっていた。

（夢じゃなかったってこと？）

しばし呆然としていた紗由だったが、『私の世界』『少年』という言葉を思い出す。信じられない話だが、現に鍵は無くなっていた。少年は——もしかすると昔の祖父のことかもしれない。

『私の世界』・・・その意味は紗由には見当もつかなかった。小説でよく見かける、『異世界』というやつなのだろうか。そんな話は到底信じられないが、現に鍵はなくなっている。

考え込んでいた紗由は、また屋根裏部屋へ行ってみようと決めた。何か分かるかもしれないと思ったからだ。紗由は急いで服を着替えると、屋根裏部屋の鍵を持って部屋を出た。

まだ早朝だけあって、家族は寝静まっていた。紗由は極力音を立てないように錠を開け、静かに扉を開けると階段をそっと上った。

部屋を見渡してみると、変わりはないように見えたが、昨日の宝箱の近くに昨日までなかったはずの小さな扉があるのをみつけた。

夢ではなくて、現実に起こったことだったのだ。

混乱しそうになる自分を無理矢理納得させると、紗由は扉を開けてみた。

3 小人の少年（前書き）

3 小人の少年

扉は小さかったが、しゃがめばなんとか入れる大きさだった。紗由は入った途端、しまったと思った。こんな不用心に入れば、馬鹿な泥棒と勘違いされるかもしれない。幸い、朝が早いのためか誰もいなかった。

辺りを見たところ、どうやら人形の家のように小さい雑貨店に紗由はいるらしかった。なぜ、屋根裏部屋がこんなところに通じているのだろうと思ったが、あの姿の見えない少女に会った後のせいか意外と驚きは少なかった。

紗由は飾られている雑貨たちに興味をそそられて、順番に見て回った。可愛いティースェットやアンティークの時計、チョコキを着たウサギの置物に金の鳩がついた小物入れ。だが、不思議なことに全ての商品が紗由の手に収まるぐらいの大きさだったので、紗由は思わず首を傾げた。

と、ある指輪が紗由の目にとまった。なぜかこの指輪だけ無造作にすみの棚に置いてある。指輪は細く金色で、中央に薄紅色の宝石がついており、普通のサイズなのだが周りのものが小さいせいでやけに目立っている。

紗由はなぜか、その指輪にひきつけられるのを感じた。まるで、あの鍵のように。突然、つけてみたいという衝動に駆られた紗由は、そつと人差し指に指輪をつけてみた。指輪はまるで、紗由のために作られたようにぴったりだった。朝日に反射して、きらきらと輝いているそれはとても美しかった。

紗由はしばらくして、勝手に商品をつけてしまったことに気づき、あわててはずそうとした。が、指輪はなぜか外れない。

「ええ！取れない!？」

あせつた紗由だが、ふと人の気配を感じて振り返った。そこには固まって目を見開く少年の姿があつた。茶色の髪に淡い青色の瞳をしており、年のころは八、九歳ほどだろう。だが、その背丈は紗由の膝ぐらいまでしかなかった。

お互い、かなりの間茫然としていたが、少年が先に我に返ったように叫んだ。

「おかあさんっ！巨人がいる！！」

その叫び声に紗由もようやく我に返り、出来る限り早く扉に向かつて這っていくと、屋根裏部屋に転がり込む様にして入った。入った途端、小さな扉は大きな音を立てて閉じられた。

あの後、紗由はしばらくの間心臓をばくばくさせて、部屋に座り込んでいた。今のは夢だったのだろうか、頬をきつくつねってみたら痛いだけだった。

手首を見てみると、あの指輪がある。引っ張って見たが、やはり取れない。これがある限り、あれは夢ではなく現実だと思い知らされるのだろう。

紗由は現実離れた話が結構好きだったが、実際に自分が体験するとなると話は全然違った。小説などで読むのはいいが、体験してみると頭が混乱してくるのだ。

（この指輪は明日返そう・・・）

紗由は深いため息を一つ吐いて、家族を起こさないよう、静かに屋根裏部屋を後にした。

4 また異世界へ

今は冬休みで、屋根裏部屋の謎を探るいい機会だった。屋根裏部屋にはじめて行ってから三日目の夜、紗由はまたあの扉へと入っていった。

雑貨店は、暗く静まり返っている。紗由はそっと立ち上がった、誰もいないことを確認すると忍び足で外に通じる扉へと向かった。が、歩いている途中で物音が聞こえ、紗由はぎょっとして振り返った。

案の定、あの時の少年が物陰からこちらを覗いていた。紗由はこの前のように叫ばれる前に、あわてて少年の口を塞いだ。（少年の顔はとても小さかったので、顔全体を覆ってしまったが。）

「静かにしてよ！叫ばれたら、困るんだから」

少年の瞳にちらりと怯えと不満と興味の気持ちが見えたが、おとなしくこくりとうなずいた。紗由は少年が叫ばないか確認するように口を塞いでいた手を離すと、少年は小声で少し怯えたようにだが、少し興奮したように聞いてきた。

「ねえ、お姉ちゃんは巨人なの？」

紗由はその口調におかしさを感じながらも、同じように小声で言い返す。

「違うよ。そっちが小人なんだと思うんだけど」

「じびとってなに？」

きょとんとした少年に、紗由はおとぎ話に出てくるものだと簡単

に説明した。少年は興味を持ったように、きらきらと瞳を輝かせて言った。

「じゃあ、お姉ちゃんとは違う世界の人なんだ」

「え？何で知ってるの？」

「だって、この国のおとぎ話であるんだもん。『昔々、ある所に巨人が迷い込んできました。王様がどこから来たのかと尋ねてみるとある世界からやって来たのだが、なぜここにいるのは小さい人ばかりなのか、と巨人は答えたのです。』・・・ほら、お姉ちゃんのとだよ、きっと」

紗由は昔、ここに自分以外の人 came のかと驚いたが、もしかすると、この世界につながる扉はいくつもあるのかもしれないと考え直した。思わず考え込んだ紗由に、少年は更に話しかけてくる。

「ねえ、名前はなんていうの？」

「へ？ああ、私は紗由。君の名前は？」

「ナツメっていうんだ。サユって、変な名前だね！向こうの世界では、そんな名前をつけるの？」

怖い気持ちが無くなってきたのか、色々聞いてくるようになったナツメに、紗由は慌てていった。このままだと、質問攻めにあいかねない。

「あのさ、この世界について詳しく知ってる人を知らない？」

ナツメは質問を遮られて不満そうだったが、しゅしゅといった感じで答える。

「この町のはずれに森があって、そこに何でも知ってる賢者様がい

るんだ。でも、夜行ったら危険だよ。朝まで待って行っただろうがいよ」

その顔には、『話をもつと聞かせて』とはつきりと書いてあった。確かに、紗由には夜の森に入る勇気はなかった。が、このまま話をしたらいつ終わらせてもらえるのか分からない。

「でも、寝なくいいの？夜も遅いし・・・」

「今日ぐらい大丈夫だもん！」

元気に答えるナツメに、ため息をついてしまった紗由だが、ふと指が目に入った拍子に指輪のことを思い出してナツメに見せた。

「この指輪、このお店に置いてあったんだけど取れなくなっちゃったの。取る方法って知らない？」

じつと、しばらくその指輪を見ていたナツメだが、首を横に振った。どうやら知らないと言うことらしい。

「こんな指輪見たのは初めてだよ。それに、これをはめれる人ってお姉ちゃんぐらいだよ」

確かにナツメの大きさなら腕輪になってしまっただろう。腕輪だとしても、違和感はないと思うが。

「それで、話は？」

ナツメが再度、話を催促してくる。紗由は結局、何時間もナツメに自分の世界の話をする羽目になったのだった。

5 猫の妖精

窓から微かな日が差し込んでくる。どうやら朝が来たらしい。顔を差す日の眩しさに、紗由は目を覚ました。紗由は目をこすりつつ、ナツメにもらった毛布から顔を出した。

夜中、何時間か話した後、ナツメは眠いと言い出してベッドに戻ってしまった。その時に毛布を渡してもらい、ひどい睡魔に襲われていた紗由はそのまま床で寝ることにしたのだ。そのせいか、背中痛みを訴えているし、ひどい寒気でくしゃみも出る。紗由はその後、自分の部屋へ戻らなかったことを今さらながら後悔していた。紗由はあくびを一つすると、暖かい毛布から抜け出した。寒さで身を震わせながら、紗由は上着でも取ってこようとしやがんであの扉をくぐろうとした。

その瞬間、紗由は自分の顔が真っ青になるのを感じた。あの扉がないのだ。慌てて辺りを見回すが、それらしきものはなくなっている。眠気が一瞬で吹き飛ぶのが分かった。

紗由は愕然として、へなへなと座り込んだ。取り乱しそうになる自分の心が、『もう二度と帰れない！』とわめいていた。だが、どこかにいる冷静な自分が『大丈夫。きっと賢者様なら何か知ってるはず。まず、賢者様の所に行くべきだよ』と紗由に言ってきた。

紗由はショックで気が遠くなるのを感じた。ぎゅうぎゅうと頬をつねると痛みがじんじんと襲ってくる。紗由はよろめきながら立ち上がると、気を落ち着かせるためにはぱんと頬を叩いて自分を励ましつつ、店から出る扉の方へ向かった。

外に出ると、容赦なく寒気が襲ってきた。寒いせいで、虚しさや悲しみがいつそう重く感じられる。紗由は胸に鉛のように重いもの

があるのを感じながら、白い息を吐いて歩き始めた。

街は小さく、小人サイズだった。普通の建物も紗由と同じぐらいの大きさである。街にはレンガ造りの小さな家が立ち並んでおり、道も石畳でできている。まるで中世の街のようだったが、今の紗由の目にはほとんど入ってこなかった。

ふと、目に入った店に家族らしき人形たち（親指サイズ）が並べられているのを見て、紗由の頭に家族や友人たちの顔が浮かんできた。紗由は涙がこみ上げてくるのを感じて、もうだめだ、と座り込んでしまった。その時、涙の粒がぽたりと一滴こぼれて指輪についた。薄紅色の宝石がずっと乳白色に変わり、また薄紅色へと戻った。だが、うつむいていた紗由はそのことに全く気がつかなかった。

朝日がだんだんと昇り始めていた。そろそろ行かないと、街の住民たちが起きだして来てしまうだろう。だが、紗由はそのことにまるで気を回す余裕が無く、そのまま動かなかった。

と、その時あどけない少年の声が近くから聞こえてきた。

「あー、いてて・・・体中こつてるよ・・・」

紗由がゆつくりと顔を上げると、目の前にかわいらしい子猫がいた。真っ白で、青色の瞳をしており、首には薄紅色の宝石がついた金の鎖をつけている。ただし、二本足で立っており、腰（？）を前足でぽんぽんと叩いていたが。

「猫が喋ってる・・・」

「猫じゃない。僕はメル。君は紗由、だっけ？」

驚いてつぶやいた紗由にメルと名乗る子猫は、四つ足になって気持ちよさそうに伸びた。猫好きの紗由は思わず手を伸ばして頭をなでた。メルはあごをなでてよ、と紗由に命令した。

紗由はいまいち状況が掴めぬまま、子猫のあごをなでてやった。

あごをなでてもらい、満足げなメルは紗由に尋ねた。

「で、なんか僕に聞くことないの？」

「なかった？」

すっかり涙がひいてしまった紗由はきょとんとしていった。すると、メルがむつとしたように言った。

「だから、なんで僕が喋るのとかさ」

「え？でも、この世界では猫が普通に喋るのかと思ったから。ここって、変なことばかり起こるし」

「違うよ。この世界の猫も、君の世界の猫と同じだよ。でも、僕は小さくないし、それに実は猫じゃないんだ」

紗由は思わず首を傾げた。猫じゃないのなら、何なのだろう。困惑したように自分をみる紗由にメルは少しえらそうに胸を張って言った。

「僕は実は妖精なんだ」

6 メル、仲間になる

「そうなの？・・・どこからどう見ても、猫なんだけど」

いぶかしげに言う紗由に、メルは明らかに気分を害した様子だった（子猫なので、それはそれで可愛らしかったが）。メルは不機嫌そうな瞳でこちらをにらみ、しっぽをぶんぶんと振った。

「ほんとだつてば！じゃあ、見ててよ」

そう言うと、メルは一瞬で姿を変えた。小さな光の粒になったメルは、紗由のしている指輪に吸い込まれていった。そして、目を見張っている紗由の目の前で、また指輪から飛び出して子猫の姿に戻った。子猫に戻ったメルは、得意げに紗由を見やった。

「どう？これで分かった？」

「・・・うん。よく分かった・・・でも、なんで指輪に？」

驚く紗由に満足したのか、メルは先ほど一変して機嫌よさそうに答える。

「僕はさっき、その指輪から出てきたんだ。けっこう長い間、その指輪に閉じ込められててさ。誰かが指輪をはめてくれないと、出れないようになってたっぽい。一応、紗由は命の恩人ってわけ」

紗由は思わず顔をしかめた。さっきから、この妖精の自分に対する態度は命の恩人に対する態度とは思えなかったからだ。その時、ふと紗由は疑問を感じて紗由に尋ねた。

「誰がメルを閉じ込めたの？」

「さあ、それが思い出せないんだよね。もし思い出せたら、生き地獄を味あわせてやるつもりだけど」

メルが目を細めて言った。紗由は内容まで聞く気にはなれなかった。確かに、メルは猫からは程遠い存在だと思わせる言動をする。そういえば、前に妖精はともいたずら好きで残酷な性格だと聞いたことがある。メルもそうなのだろうか。

「じゃあ、そろそろ行こう」

急にメルが言い出したので、紗由はきよんとしてメルの顔を見つめた。そんな紗由に、メルはいらだったように更に言った。

「行かないの？急がないと、もう住人たちが起きてくるよ」

「え？で、でも何でメルも・・・一緒に行くの？」

「僕はその指輪から離れられないみたいなんだ。それに、ここ寒いし・・・。ほら、早く！賢者のところに行くんでしょ」

立ち上がって歩き出した紗由は、その言葉に驚いて言った。メルに会ったのはついさっきのはずだ。

「何で知ってるの？」

「ちよつと話を聞いたただだよ」

指輪の中でも話が聞こえるのかと半分感心、半分嫌な気持ちになりつつ、紗由は人気のない道をメルとともに早歩きし始めた（足音で住人の目が覚めないかとひやひやしなから）。

大きな通りをまっすぐ行くと、案外すぐに街を抜けることができた。後ろを振り返ると、おもちゃのような街が見えた。その周りはずっと草原に囲まれている。まるでゲームの世界に入り込んだみたい、と思いながら紗由はこれから行く森を見やった。

木はどれも紗由と同じぐらいか、それより少し高いかぐらいだった。ここで問題が起きた。森の中へと続く小道は、とてもではないが紗由の通れる大きさではなかった。小人がちょうど通れる大きさだろう。

「ねえ、メルって魔法が使える？」

メルは紗由の言わんとすることを察したようだった。だが、メルは首を横に振って言った。

「一応使えるけど、妖精にも属性があるんだよ。僕は風の妖精だから、人を小さくすることなんてできないよ。まあ、変身ならできるけど」

「そうなの・・・じゃあ、どうしよう」

すっかり考え込んでしまった二人だが、そこで金切り声でしゃべる鳥が飛んできたので二人の考えは中断された。紗由は眉をしかめて耳を塞いだ。メルも、ひょいっと二本足で立つと同じように耳を塞ぐ。真っ青な鳥（これもやっぱり小さい）は、それにかまわず二人に話しかけてきた。

「お二人さん、こんなところで何してんだ？巨人と巨大な子猫なんて珍しい組み合わせだな」

かろうじて、その声を聞き取った紗由が答える。メルは子猫には

そぐわない表情で小鳥を見ていた。

「ちょ、ちよっと困ってて……。この森に住む賢者様に用があるんだけど」

「ああ、お客さんか。でも、その大きさじゃあここには入れないな。ちよっと待っててくれ」

ばたばたとうるさい羽音を立てて、鳥は行ってしまった。紗由とメルはほっとして、耳を塞ぐ手を離れた。紗由はまだ耳がキンキンするのを感じながら、メルにたずねた。

「あの鳥は何？この世界にはあんな動物もいるの？」

「多分、普通の小鳥に魔法をかけてしゃべれるようにしたんだと思う。それにしても、よっぽど食べてやろうかと思っただよ」

しばらくして、あのうるさい鳥が足に何かをひっかけて戻ってきた。二人が条件反射のように耳を塞ぐと、小鳥は足にかけてある真っ赤な粒がいくつか入ったビンを振って、しゃべり始めた。

「ほら、これ賢者様からもらったんだ。この薬を飲むと体が小さくなるんだってよ。あと、家まで案内しろって言われたから、それ飲んだらついてきなよ」

「分かった、分かったから飲む間ぐらい静かにしててよ！」

ようやく静かになった鳥から、ビンを受け取って爪の先ほどの大きさの薬を取り出す。思い切って飲んでみたが、小さすぎていまいち飲んだ気がしない。

と、見る見るうちに体が小さくなっていき、周りのものが全て大きくなっていくように感じた。小鳥や森が普通のサイズに見えるよ

うになっている。紗由はその急な変化に、気分が悪くなるのを感じた。めまいもひどい。

メルのほうは、やけに涼しげな顔をしている。そんなメルに憎らしさを感じながらも、紗由はしばらくここで休憩することにした。

7 森の賢者

だいぶ気分が良くなってきた紗由は、まだ体が小さくなったことに違和感を感じながらも、ようやく立ち上がった。メルはやつとかと言わんばかりにあくびを一つすると、青い鳥に賢者のところまで案内をするよう（かなり上から目線で）言った。

青い鳥はまたけたたましくしゃべり始めたが、紗由とメルは耳を塞いで無視を決め込むと、森に足を踏み入れた。

森は外からは暗い印象があつたが、入ってみると木漏れ日のおかげで案外明るかった。葉をびつしりとつけた針葉樹たちのおかげか、あまり冬の枯れ木を見たときのような寂しさを感じない。まるで、外国の映画や本に出てくる森みたいだった。道もしっかり整備されていて、歩きやすい。紗由は冷たくて、綺麗な空気を胸いっぱい吸い込んだ。

鳥が尻尾を引っ張ると静かになることに気づいてからは、紗由は自分の状況を忘れてこの散歩を楽しむことに決めた。

「そういえばさ、なんで賢者のところに行くの？」

「だって、向こうの世界への帰り方を知ってるかもしれないじゃない。原因だけでも分かれば嬉しいけど・・・」

「ふーん・・・。そう都合よく事が進むとは思えないけどねえ」

メルが鳥のうるさい羽ばたきに顔をしかめながら言った。紗由はその言い方にむっとして言い返す。

「なんで、そんな後ろ向きな言い方をするの。メルは別に自分は関

係ないと思ってるかもしれないけど、私には・・・」
「それはないよ。僕だって自分の世界に帰りたいし」

投げやりな口調で、紗由の言葉を遮るようにメルが言う。紗由が
どういうことか聞こうとした直後に、少し先を飛んでいた青い鳥が、
金切り声で到着を知らせた。

その簡素な丸太小屋は、森の開けたところに立っていた。青い鳥
は簡素な小屋の周りで餌をつつく仲間をみて、紗由とメルを無視し
てその中に混ざりこんだ。

紗由は賢者に対して持っていたイメージとの違いに驚きつつ、小
屋の戸をノックして声をかけた。すると、すぐに返事が聞こえ、戸
が開かれた。

「おや、珍しいお客さんじゃの。青い鳥に案内されてきたんじゃろ
う」

出てきたのは、灰色のローブに身を包んだ小柄な老人だった（こ
こは、紗由のイメージどおりだった）。紗由が頷くと、老人は人の
よさそうな笑顔で紗由とメルを順番に見つめた。

そして、二人に中に入るように促すと、紗由とメルを居間に案内
した。老人は椅子で待つようにと言い、奥へ引っ込んだ。

紗由は老人がいなくなると、小声でメルに話しかけた。

「ねえ、あの人ほんとに賢者様なのかな。普通のおじいさんに見え
なくもないけど」

「さあね。でも、魔力を感じるから、普通の人間ではなさそうだ」

「え？何で分かるの？」

「さっきの青い鳥が良い例だよ。それと、あの人が僕たちに小さくなる薬をよこしたこと、忘れたの」

なるほど、と頷いていると老人がお茶の入ったカップとミルクの入った皿を手に戻ってきた。メルは不機嫌そうに尻尾をふりつつも、大人しく皿からミルクを飲んだ。紗由も変わった匂いのするお茶に口をつけた。

「それで、何か相談でもあるのかの」

老人が早速切り出してきた。どうやら、普段からしょっちゅう相談に乗っているようだ。紗由は信じてもらえないかもしれないが、と今まで体験したことを詳しく説明し始めた。メルは興味なさそうに顔を洗っていた。

老人は静かに聞いていたが、聞き終わった後に一言だけ言った。

「正直に言うがの、わしには分からん」

紗由はもうすぐで椅子から転げ落ちるところだった。メルも驚いて目を丸く見開いている。賢者なら何か知っていると思ったのに、と紗由ががっくり落ち込んでいると、賢者は愉快そうに笑って言った。

「まあまあ、そう落ち込むのは早い。確かなことは言えぬが、鍵はもしやすると妖精か精霊が、何か関係しているのかもしれないのう。その妖精は何も知らんのか？」

メルはまたぎょつとしたように賢者を見た。賢者には何もかもお見通しらしい。紗由もなぜ分かったのかと首を傾げつつ、言った。

「その鍵のことより、私はどうやったら帰れるのか知りたいんです。あ、あとできればメル・・・この子猫のことです。メルも自分の世界に帰りたいらしいんですけど」

「僕はいいいよ。それより、その鍵のほうに興味持つちゃった」

一言もしゃべらなかつたメルが、瞳を妖しく輝かせて言った。紗由は何を言ってるんだ、とメルを睨んだがメルはその視線を軽く受け流した。

賢者はうつむ、と考え込んだ末に言った。

「そうじゃなあ・・・いや、案外鍵のことが分かれば、おぬしも元の世界に帰ることができるかもしれんぞ。その鍵が全ての元じゃからな」

8 賢者の話

紗由は賢者の言葉について考えてみたが、鍵と自分が帰れなくなってしまったことに関係があるとは思えなかった。メルは考え込む紗由を、何を考えているか分からない瞳で見つめた。

「あのう・・・、賢者様は私に鍵を探せと言いたいんですか？」

恐る恐る言ってみると、賢者様はあごに蓄えたひげを触りながら言った。

「そうは言っておらんが、鍵を見つければ、何か分かるかもしれん。そういうことじゃ」

紗由は自分が鍵を探すしか道はない、とその瞬間悟った。そうしなければ、一生元の世界へ帰ることはできないだろう。

「じゃあ、これから鍵を探しにいきます。・・・メルはどうする？」

「紗由、君この世界のことを聞きたんじゃなかったの？」

神妙な面持ちで言った紗由に、メルが平然と言った。

「そうじゃなあ・・・。確か地図があつたはずじゃが」

紗由が忘れてた、と赤面するのを面白がっているような瞳で見ながら、賢者は鳶色の瞳を瞬かせて言った。賢者はゆっくりと立ち上がると、居間においてある棚の奥のほうから、古めかしい世界地図

を引っ張り出してきた。

地図には真ん中にぽっかり穴の開いた大きな大陸があり、紗由には読めない言葉で国の名前らしいものがいくつか書かれていた。そして、大きな大陸の真ん中にはごま粒ほどの島が描かれていた。

賢者の言ったことをざっとまとめると、この世界は昔、一つの王国だったものがいくつもの小国に分かれて今の形になったらしい。そのほかにも、いくつかの少数民族もいるという。

この世界では文明はあまり進んではないらしいが、魔法などの不思議な力や精霊、一角獣など、小説にしか出てこないようなものも存在している。昔は争いの絶えない時代もあったが、今は比較的穏やかで平和な世界であるらしい。

紗由が真ん中に書いてある小さな島のことを尋ねると、賢者はメルの方を意味ありげに見てから、答えた。

「ここは、『フォーネル』。別名、『精霊の国』じゃ」

その時、本当にわずかだが——ふてぶてしく椅子に丸まっていたメルの耳が、ピクリと動いたのを紗由ははつきりと見た。

紗由は視線を賢者に戻した。賢者は、相変わらず善良そうな顔つきでこちらをみている。

「じゃあ、ここには精霊がたくさん住んでいるんですか？」

「昔は精霊が国を治めておったのじゃが・・・今やフォーネルは死の国じゃ。精霊も妖精も、他の世界に逃げたと言われておる。原因は、わしにも分からね」

「そうですか・・・」

紗由はふと、精霊が鍵に関係していると聞いたことを思い出した。もしかしたら、ここへ行けば何か分かるのかもしれない。

「おぬし・・・ここへ行こうとしているな？」

「えっ！？何で分かったんですか？」

驚く紗由に、賢者は打って変わって厳しい声で言った。

「フォーネルへ行つて、生きて帰ったものはおらん。悪いことは言わん。おぬしの帰る方法は、こちらでも調べておくが、あそこだけは行つてはならぬ」

「・・・はい」

納得できない気持ちを押し込めて、紗由は素直に頷いた。メルは青い瞳を細めて、そんな紗由をじっと見ていた。

9 出発

「色々ありがとうございます、賢者様」

厳しく注意されてしまった後、紗由とメルはこの世界の色々な知識を教えてもらった（と言ってもメルは知っていることばかりなのか、ろくに聞いてない様子だったが）。他にも、保存できる食料や必要なお金などが渡された。お金は通貨単位がフォリンで、円とはあまり使い方が変わらないらしい。

教えてもらい終わって紗由がぺこりと頭を下げると、賢者はぽんと手を叩いて何かを思い出したかのように言った。

「忘れておった！名前をまだ聞いてなかったのお」

「そうだったっけ……。あ、私は紗由です。こっちはメル。もう分かってるかもしれないけど、妖精らしいです」

大きく口を開けてあくびをするメルは（不覚にも紗由は可愛いと思ってしまった）、やっとかと言わんばかりに二本足で立ち上がった。賢者は頷いたが、ふと紗由の指にはめてある指輪に目を留めた。

「その指輪はなんじゃ？」

「これ、ですか？これは街の雑貨屋さんにあっただんだけど、はめたら取れなくなっちゃって……。どうすれば取れますか？」

紗由はぐいぐいと引っ張って見せた。指輪は相変わらず、紗由の指に吸い付いているかのようにはまっている。賢者はしばらく指輪をまじまじと見ていたが、メルの方に向き直って尋ねた。

「メル、といったか。おぬしは取り方を知っておるんじゃないっ？」

メルは賢者を一瞥した。紗由は思わずむっとする。さつきから、この見た目だけはかわいらしい妖精の態度は失礼としか言いようがない。妖精なので、仕方がないのかもしれないが。

「知ってたけど、忘れた。誰かがこの指輪に僕を封じ込めた時、記憶を奪ったんだ。妖精であることと、自分が他の世界から来たことと、この世界で得た知識以外、全部覚えていない」

「じゃが、鍵を見つければ記憶も取り戻せて、その指輪にかけられた呪文も解けるかもしれんぞ」

「・・・分かつてる」

つぶやくようにメルが言った。先ほどとは一変した雰囲気戸惑った紗由は、とりあえずメルに聞いてみた。

「ねえ、それでメルも旅についてくるの？指輪から離れられないわけだし」

「もちろん。でも、勘違いしないでよ。僕は自分のために鍵を見つける。もし、この呪文が解けて君が帰れないことになっても、僕は君を見捨てるからね」

出発前に、地図と食料、お金を袋にまとめ、紗由の腰に縛っておいた。いつの間にか外は日が高くなっていたため、朝食を食べていなかった紗由は遠慮なく昼食に招かれた。メルは食べなくても生きていけるらしいが、妖精は食べることを嗜好品にしているという。ということ、メルも遠慮なく昼食を食べ始めた。

テーブルに並べられた食事はどれも美味しく、紗由は目を丸くした。メルは特に何も言わないが、その顔からして結構満足してるら

しい。

「そついえば、ここって時計がないんですか？」

紗由がミートパイを夢中でほおびながら言った。ここにも、街にも時計らしきものはなかった。時間が分からないせいか、紗由はさつきから違和感を感じていた。

「ああ、この世界にはないんじや。まあ、朝と昼と晩が分かれば何の不便もないからのう」

「へえー、賢者様って本当にいろんなこと、知ってますよね。私の世界のことも知ってるみたいだし」

紗由が感心して言った。メルはといえば、器用に肉球でフォークを持ってサラダを食べている。その奇妙な光景に気づいた紗由は、危うくむせるところだった。

「若い頃に、そっちの世界に知り合いがおつての……。色々なことを教えてもらったものじゃ」

賢者が遠い日を懐かしむように、目を細めた。紗由は、自分の他にこの世界にきた人がいたことに興味をそそられて、誰なのか尋ねた。が、賢者は穏やかに笑って、さり気なく他の話題を話し始めた。うまくはぐらかされてしまった紗由だが、食事に集中することにしてそのことは忘れてしまった。

「はあ、ごちそう様でした……。そろそろ行こうか、メル」

これまでこんなに食べたことがあるのだろうかと思うほど食べた紗由は、メルに声をかけた。メルは返事の代わりにげっぷを返してきた。

戸を開けると、冬らしい冷たい風と弱々しい太陽の光が紗由とメルに当たってきた。紗由は白い息を吐いて、賢者に礼を言い、別れを告げる。

二人の背中が遠くなっていく。小屋の周りでは餌をつつく鳥たちが鳴いていた。賢者はそつとつぶやいた。

「紗由か……。お前に似とるのう、風太……」

二人の背中には既に見えなくなっていた。だが、賢者はずっと外でたたずんでいた。どつしりと葉をつけた針葉樹たちが、そんな彼を静かに見守っていた。

10 旅の準備（前書き）

私立に受かることができ、一段落中。
というわけで、久しぶりの更新です。

10 旅の準備

「さて、町に戻りますか」

森を抜けた二人は、また元の場所へ戻ってきていた。紗由が提案すると、メルは何度か瞬きをしてから頷く。二人は先ほどとは全く違う場所に見える景色をみながら、先ほどと違ってやけに大きく感じる石畳の道を歩き始めた。

おもちゃサイズだった町が、突然普通サイズの町に見える。紗由は違和感を覚え、まだまだ小さくなったことに慣れていないことを感じた。一方、隣で四足歩行しているメルは全く普段と変わらない様子で歩いている。紗由は視線が集中する居心地の悪さを感じながら、周りの人に聞こえないよう、小声でメルに話しかけた。

「メルは違和感ないの？さっきから平然としてるけど」

「いや、そんなに感じない。指輪に入るときの方がもっとすごいよ」
「あ、そう・・・」

紗由は聞いても無駄か、と思いとりあえず服を売っているお店を探すことに専念した。さっきから、あちらの世界の服を着ている紗由は結構目立つらしく、注目を浴びていたのだ。それに、周りの人間——もとい小人たちは色々な髪をしている者が多いが、黒髪は全く見当たらない。黒い瞳を持つ者もないようだ。

それも目立つ原因なのだろうが、紗由はついつい早足になってしまっ

「おう、お嬢ちゃん・・・と可愛い猫ちゃん。旅人かい？」

誰かに後ろから話しかけられ、紗由は振り向いた。そこには、体格の良い体といかつい顔つきをした三十代ぐらいと思われる男がいた。紗由は思わず少し後ずさる。

「そう警戒すんなって。それにしても、変わった服着てるな。何処の国から来たんだ？」

「え？えつと・・・」

ちらりとメルに視線を送るが、知るかといわんばかりに目を逸らされる。紗由は軽く怒りを覚えたが、男が怪訝な顔をしているので仕方なく視線を戻した。

「ちよつと、訳ありません・・・。あまり詳しいことはいえませんが・・・」

信じてもらえないと思うし、と心の中で付け足しながら紗由は言った。男はしばらく紗由とメルを見比べていたが、はーんと意味ありげな笑みを浮かべて、こそつと耳打ちした。

「お嬢ちゃん、実はどつかのご令嬢なんだろ。可愛い顔してるし、世間知らずっぽいしな。まあ、なんで旅してるのかなんてこたあ、聞かねえよ。複雑な事情でもあるんだろうしな」

「ちが・・・」

どうやら完全に勘違いしているらしい。否定しようとしたその時、メルが尻尾でばしと紗由の足を叩いた。見おろすと、勘違いさせておけとメルの瞳が言っている・・・様な気がした。紗由は少し迷った末、やっぱり口をつぐむことにした。男はそれを肯定と受け取ったのか、豪快に笑って言った。

「やっぱりそうなんだな。でもよお、そんな格好じゃ旅は無理だぜ。うちの店に寄ってけよ。結構、品揃えいいって評判なんだぜ？」

「へ？」

「おじさん、店主だったんですね・・・」

ずらりと並べられた様々な武器や防具に、紗由が目を丸くした。さつき町の看板を見た時に気づいたのだが、紗由はこの世界の文字が読めないらしい。なぜか、言葉は通じるのだが。

そんな訳で、紗由は入るまでここが何の店なのかさっぱり分からなかった。入った途端、武器や防具を売る店なのは分かったが、武器など見たことも無い自分が何を買えるというのだろう。

「まだ、おじさんって年じゃあねえよ。俺はフレイグだ。このお店は『トルクル』。最近は旅人や冒険者やらが多いからなあ。そういう連中に武器だの何だのを売るのが俺の仕事だ」

「でも、私武器なんて使えませんよ。見るのだって初めてだし・・・」

「

フレイグ、と名乗った男はよく喋った。その気さくさに紗由は好感を持ったが、メルの方は気に食わないのか、ふんつと鼻を鳴らし、店を見回っている。その姿は商品の品定めをする主婦のようで、紗由は慌てて笑いをこらえた。

フレイグはそんな様子にも気づかずに、滑らかな革製の鞘に入った短剣を見せていった。

「護身用に持つとくのも大事だと思うぜ。万が一ってこともあるかなあ。これ、お嬢ちゃんにおすすめだ。軽くて切れ味は抜群」

「護身用・・・」

紗由はじつとその短剣を見つめた。受け取ってみると、確かに軽めで使いやすそうだ。ただし、使うかどうかは別である。だが、基本的に財布の紐がゆるめな紗由は散々悩んだ末に、買うことに決めた。

フレイグが新しく来た客の相手をしている間に、今度は服を探す。なるべく軽装で簡素な物を選んでいると、足にばしばしと何かが当たった。メル尻尾だ。

「紗由。これとか、いいんじゃない」

メルがひょいっと顎で示した先には、チュニツクラしき服があった。少しゆったりしているが、持ってみると肌触りがよく、生地もしっかりしているので、防寒にはちょうどよさそうだ。

「すごくいい！でも、メルよくこんないいの見つけたよね」

「ちょ、やめてよ。あんまりやると、指輪の中に戻るよ」

紗由が思わずメルを抱き上げると、メルが爪をにゅっと出して抗議の声を上げた。が、紗由が無視して抱っこしていると、身をよじって紗由の腕から逃れた。紗由はそこまで嫌がらなくても、とむつとしたが、服探しを優先させることにした。

その後、紗由はポンチョらしきものと編み上げブーツ見つけて、それも買うことに決めた。そして、客の相手が終わったフレイグに少くない額のお金を渡す。

「まいどあり・・・でもよ、ほんとにこんな軽装でいいのか？」

「いいんです。あ、あと・・・服もう変えたいんですけど、今着てる服ここにおいてもらっても構いませんか？」

「いいけどよ」

紗由はいつか自分の世界に帰るときのことを考えて、服をとっておくことにした。フレイグは少し怪訝そうな顔のまま承諾をした。

奥の個室で着替えを済ませた紗由は、なんだか生まれ変わったような気持ちで鏡に映る自分を見つめた。帰れるかどうか分からない不安はまだ残るが、それでもわずかな可能性も諦めてはいない。紗由は深呼吸をして個室のドアを開けた。外ではメルとフレイグが待っていた。フレイグは感心したように、紗由の格好を眺めた。

「お嬢ちゃん、結構にあつてるぜ。目的は知らねえが、がんばれよ・
・またここらに来ることがあったら、寄ってけよ」

「ありがとうございます、フレイグさん。メル、行こっか」

なんだかフレイグの言葉がじんと心に染み渡って、紗由は笑顔でお礼を言った。それからメルに話しかけると、紗由の前で初めて子猫らしくみやおうと鳴いた。また抱き上げたくなる衝動に駆られたが、フレイグのいる手前、我慢してその衝動を押さえ込む。

フレイグに別れを告げた紗由は、装いも心も新たに、メルとともに町を後にした。

10 旅の準備（後書き）

今さらですが、メルモデルは家で飼っている猫（6歳・オス）です。

かなり無愛想なので、メルは愛想のいい子にする予定・・・でした。それにしても、猫って意外と書くのが難しい・・・。

11 竜巻の中

薄らと厚い雲の間から弱々しく太陽が顔を覗かせていた。弱い光に照らされた大地は、冬らしく殺風景で生命の温かみを感じられない。

草原にある一本の細い道を、紗由とメルは鼻の頭を赤くして歩いていた。元いた世界と違い、ここの冬は耐えられるほどの寒さなのが救いだっただ。紗由は白い息を吐き出してから、辺りを見渡してみた。だが、どこまでも枯れ草の草原が見えるだけで町らしきものは見当たらない。

「なにもないね・・・」

小さく呟くと、メルがふんつと鼻を鳴らした。思わず見下ろすと、二本足で歩いていたメルが腕を大げさに振っていた。

「言つとくけど、ここらに町は無いよ。紗由が馬車代、ケチったからねえ。あと何日かかるんだろなあ・・・」

「い、いいでしょ。こんなに町が無いって知らなかったんだもん」

わざとらしくぼやくメルに、紗由は少し顔を赤らめた。残金が心許ないと感じた紗由は、町と町を行き来する馬車に乗るのをやめたのだ。そのせいで、今後悔しているのだが。

つつい足を速めた紗由に、メルが同じスピードで着いて来る。子猫の見た目のくせに、メルは歩くのが妙に速かった。メルがにやりと笑って（なんだか不気味だ）言った。

「別に責めてるんじゃないよ？ただ、僕は・・・んん？」

メルが急に青い目を細め、喋るのをやめた。紗由も不思議に思い、メルの見ている方向に目を凝らす。

最初は何も無かった。だが、それはだんだん大きくなってこちらに近づいてきてる。それはどうやら、いや明らかに――竜巻だった。

「な・・・メ、メル逃げよう!!」

あせってメルを掴むと、くるりと回れ右をする。そんな紗由に、メルが迷惑そうに文句を言ってきた。

「こら!ちよつと、待ってよ。あの竜巻が来るのを待とう」

「は!?メル、死にたいの?もう、じゃあね!短い間だけど会えてよかった!」

走ろうとした紗由の腕に、メルが噛み付いた。紗由は痛みと驚きの声を上げ、腕の力が緩んだ隙を見てメルが飛び降りる。その間にも、竜巻はぐるぐると回りながら確実にこちらに近づいてきていた。

「痛!なにすんの!」

「ちよつとは冷静になった?一旦待とうって言ってるだろ。ほら、死なないから大丈夫だって」

メルは口早に言うと、逃げようとする紗由のブーツの紐に噛みついてぐいぐいと引つ張り、踏ん張った。竜巻がすぐそこまで迫ってきてる。紗由は凄まじい風の音を聞きながら、もう駄目だ、と目を強く瞑った。

ふわりと体が浮き上がる。内臓まで浮き上がったような感覚に襲われた紗由は、体中に鳥肌が立つのを感じた。目が回り、一瞬で辺りの様子が分からなくなる。そのままメルとともに、紗由は強い風に巻き込まれた。

「おい、起きろ。ばか紗由」

柔らかくてふにふにした感触のものが頬を押してくる。そして、可愛らしいが憎らしく思える少年の声が聞こえてきた。ぼんやりと目を覚ました紗由は、すぐにその声の主に気づき、寝転んだままその小さくてふわふわした頭を軽くはたいた。

「誰がばかだ・・・」

「ちっ・・・。あれ、起きてたの？」

小さい舌打ちのあと、しらばつくれたように子猫——メルが大きい瞳をぱちくりさせた。うそ臭い演技に顔をしかめつつ、紗由は体を起こした。

「で、ここは・・・？」

紗由はたった今周りの様子に気づき、辺りをきょろきょろと見回す。どうやら二人は建物の中にいるようだった。六畳ほどの空間に、ごつごつとした石でできた壁と床。床には白色の柔らかい敷物がひかれており、壁には人一人通れるかどうかという大きさの木製の扉があった。壁の高いところを見ると、ほのかに光が差しこむ丸窓があり、二人を優しく照らしていた。

「さあね。でも、僕も起きたらここにいたんだ」

「でも、さつき私たちは・・・」

そういえば、竜巻に巻き込まれてからの記憶がいまいちない。も

しかすると、運よく竜巻から出られたのだろうか。だとすると、一体ここは……？

「良かった、助かって……でも、ここはどこだろ」

「あ、そうだ」

メルが思い出したというように、ぱんと手（もとい前足）を打った。そして、ぱつと光の粒子になると、一瞬で真っ白で可愛い小鳥の姿に変化した。

「びっくりした……メル、変身できたんだっけ」

「まあね。ていうか、忘れかけていたけど」

自慢げに翼をぱたぱたさせながらメルがさえざるように言った。

それから、翼を広げて窓へと向かうと、窓のふちに止まり、外の様子を探りはじめる。紗由は下からそれを見上げながら、声を掛けた。

「何か見えたー？」

メルは窓にはめ込まれたガラスを小さなくちばしでこんこんと叩いてみてから、また飛んで紗由の横へ舞い降りた。そして、また白い子猫の姿へと戻る。

「外は……町みたいだった。普通の。でも、そこにいたものが……」

言いかけたメルは、気配を感じて扉を見た。紗由も何かと思つて見た途端、誰かが扉の外に立つ気配を感じて、思わず扉を凝視する。メルも青い瞳を見開いて扉に注目していた。

二人が見つめる前で、扉は静かに開かれた。

12 竜巻の国

息を呑んで扉を見守る紗由の前で、扉が開いた。メルは平然とした表情で、紗由は驚きの表情で入ってきたものを迎える。

「可愛い・・・」

おどおどと入ってきたのは、ふんわりと浮かぶ小さな光を纏った、紗由より少し年下に見える少女だった。花の刺繍がされた白いワンピースを身に付け、頭には羽の髪飾りをつけている。手には透明がかったスズランのような花を二つ握り締めていた。

少女は少し怯えたように二人を見つめてから、頬をりんごのように赤くして何かを一生懸命喋り始めた。

だが、紗由は顔をしかめてメルのふさふさの耳にこそつと話しかけた。

「・・・メル、あの子なんていつてる？」

少女の言葉はさっぱり分からなかった。「きゆるきゆる・・・」と言っているようにも聞こえるが、聞き取れないだけで本当は喋っているのだろう。

メルはさあ、とでも言うようにしつぽを二、三回振った。少女の方は、言葉が通じていないことに今さら気づいたらしく、慌てて手に持っていた花を二人に差しだしてきた。

紗由とメルが受け取ると、少女は花をかぐような仕草を示した。二人も真似て、受け取った花の匂いをかいでみる。

「きゆる・・・るる・・・の、あの、言葉分かる？」

「・・・うん、分かるよ。すごいね、この花は何？」

紗由はまず驚き、次に興奮したように花を指差した。少女は言葉が通じるようになったことを知り、ほっとした顔で説明をする。

「この花は、匂いをかいだ人の言葉を分かるようにするの。この国にはいっぱい生えてるよ」

紗由はああ、と納得したように頷いた。

「花が翻訳機つてわけか。なるほど」

いつせいにメルと少女が不思議そうにこちらを見てきた。紗由は慌てて「何でもない」と言い繕う。すっかりここが異世界だということを忘れかけていた事に気づき、紗由は言動に十分気をつけるよう自分に言い聞かせた。

メルは怪訝そうな顔をしたまま、少女に尋ねた。

「あのさ、色々と聞きたいことがあるんだけど。説明、してくれるよね？」

まるでそれが当たり前だろつと言わんばかりの言い方だった。偉そうにいうメルのしつぽを引っ張ってやろつかと思っただが、紗由も同じことを思っていたので何もしないことにした。

少女はためらいがちに頷いた。

お互い簡単に自己紹介した後、フェリイと名乗った少女はこぼんと咳払いをして話し始めた。

「最初に言っけど、ここは竜巻の中の国なの」

しばしの沈黙。その間に紗由の頭の中に一気にかなりの数の質問が浮かんでは消えたが、辛うじて一つだけ聞いておいた。

「・・・どういうこと？」

「話せば長くなっちゃうけど・・・」

フェリイの説明によると、大昔はこの国も地上に存在していたらしい。この国は、元々は人間に幸福を与える妖精、シーリーたちの国だった。

「フェリイって妖精だったの？」

「一応・・・」

紗由が更に何か聞きたそうな様子をしているのをみて、黙って聞け、と無言の圧力をメルがかけてくる。紗由は仕方なく口を挟むのをやめた。

だが、数百年ほど前から、だんだん人間は妖精を始めとする伝説とされる生き物たちの存在を信じなくなってきた。それでもシーリーは人間と共存しようとしたが、捕まって見世物にされる仲間が出てきたため、仕方なく人間から離れることにしたのだという。

百年ほど世界を巡った末に、シーリーたちはある島へたどり着いた。そこは精霊や妖精たちの故郷といわれる場所で、シーリーたちはそこで『神様』に出会ったらしい。『神様』は、また自分たちの国を持ちたい、という彼らの願いを聞き入れ、ある大きな竜巻を与えた。『神様』いわく、竜巻の中に大きな土地を造っておいたから後は好きにしないさい、とのことだった。

その後、彼らは早速自分たちの国を造り、誰にも侵略されること

もなく、今に至るまで平和に暮らしてきたのだという。

「まあ、色々疑問はあるけど、とりあえず分かった」

フェリイの拙い説明が終わった後、メルがあっさりと言った。紗由も頷くが、ふと思い浮かんだ疑問を口にした。

「でも、なんで私たちここに居るの？多分だけど、フェリイが運んでくれたんだよね？」

「それは・・・」

フェリイが言いよどみ、紗由が不思議に思った時、どんどんと遠くから戸が激しく叩かれる音が聞こえた。明らかに普通の叩き方ではない——今にも戸を蹴破らんばかりの勢い力と思うぐらいだった。フェリイの表情が一瞬でこわばり、メルも異変を感じてすっと目を細めた。緊迫した空気に、紗由は訳が分からずにうろたえた。

「紗由さん、メルさん——とりあえず、ここに隠れて」

フェリイが戸のあるらしい方向を気にしながらも、素早く敷物をめくってそこにあつた取っ手を掴んだ。重たそうな隠し扉を開き、驚く二人に早く中へ入るよう促す。紗由は慌てて、メルはいぶかしげな顔で中へと入る。

二人が中に入ったことを確認したフェリイは、重い扉を閉め、惑わしの呪文を唱えて扉を隠した。そして、覚悟を決めたように唾を飲み込み立ち上がると、部屋を後にした。

13 暗闇の中で

フェリイは緊張したまま、玄関へと急いでいた。戸はなお叩かれているようで、音は止んでいない。フェリイはもしかしてばれてしまったのだろうか、と泣き出したい気分だった。もしばれても、あの二人はきっと見つからないだろう。だが、自分は――。

小さい家なのですぐに玄関にたどり着いてしまった。玄関の小さな鏡に映った自分の顔は、青ざめていた。こうなることは、あの二人を家に入れた時点で分かっていたはずなのに。我ながらひどい顔だと、思わず苦笑がもれる。

フェリイは二、三度深呼吸をしてから取っ手に手をかけ、戸を開けた。

暗闇の中、紗由は息を潜めてフェリイの帰りを待っていた。暗闇のせいか、時間の感覚は無くなって来ている。でも、時間がけっこう経っているような気がする。もしかして、何かあったのだろうか――。

「・・・メル。さっきから何やってんの？」

目の慣れてきた紗由は、先ほどからごそごそと何かをしている白い毛の塊に尋ねた。暗いせいであまりはつきりとは見えないが、何かを探っているように見える。人が心配している横でなにやってるんだ、と紗由はメルを睨んだ。白い塊はそんな紗由の気を知ってか知らずか、のん気そうに返事をする。

「ここ、地下の食料庫みたいなんだ。で、優しい僕は君のためにい

いものを見繕ってるって訳さ。食事代も浮くしね」
「要するに、泥棒でしょ」

呆れた紗由はメルの首の皮辺りを掴み、ひょいっと持ち上げた。メルが怒ったようにじたばたと暴れて、抗議の鳴き声を上げたが、迫力など無いに等しいので無視する。

「最近ほんとに猫みたいになってきたね」
「失礼な・・・しっ！」

メルが急に暴れるのを止めた。怪訝そうに見ると、三角の耳をぴくぴくと動かして聞き耳を立てている。紗由もそれに倣い、耳を澄ましてみる。

しばらくして、どたどたとうるさい足音が遠くから聞こえてきた。だが、フェリイのものとは思えない。どうやら、男の足音のようだ。
「誰だろ？」

不思議に思い、小声で聞いてみたが、白い相棒は無言で『黙っている』というような視線を送ってきた。紗由は黙って音を聞くことに専念した。

扉が開かれる音がした。敷物を通して、二つの足音が伝わってくる。二人いるのだろうか。侵入者、という言葉が紗由の脳裏に浮かび、見つからないと分かっているにも関わらず、緊張で心臓が跳ねた。

「人間の気配がするか？」

よく通る男の声が聞こえ、紗由はどきりとした。誰なのかは分からないが、その口調は刺々しく苛立っているようだった。紗由は思

わず身をすくませた。メルの耳が声に反応して動く。

「・・・分かりません。何か呪文がかけてあるのかもしれませんが」

今度は若々しい、低く落ち着いた声がした。会話から察するに人間——紗由のことを探しているようだ。そのことに気づき、心臓が冷水をかけられたようにひやりと冷たくなる。フェリイはもしかするとこのことを言いかけていたのだろうか？それで二人をかばって――。

紗由は顔が青ざめさせていた頃、足元に探しものがあるとは全く知らない二人の男が、部屋の中を探っていた。

敷物以外敷かれておらず、殺風景な部屋だが、この部屋以外は既に調べつくしていた。背の低い方の男が苛々と足踏みをしながら、顔を歪めた。

「ええい、何でいないんだ！目撃者もいるというのに——」

「まあまあ、落ち着いてください。あの少女に口を割らせれば問題ないでしょう」

思わず舌打ちをすると、背の高い若々しい男が涼しげな声で言った。背の低い男は唸りつつも、それもそうだな、としぶしぶ頷く。そして、少し名残惜しげに部屋を睨み付けてから、踵を返した。背の高い男もそれに続く。

「だが、あの小娘なかなか頑固そうだぞ。さつきも——」

ばたん、と扉が荒々しく閉められた。男の声と足音が遠ざかっていく。

紗由はそれを呆然とした面持ちで聞いていた。

「どうしよう、メル！フェリイに何かあったのかも・・・」

紗由が慌てて言ったが、メルの顔は冷静そのものだった。子猫は何かを思案しているようだった。考え込んだ末に口を開く。

「今はシーリーたちみたいだね。人間のこと、相当嫌ってるみたいだ。フェリイはもしかしたら僕たちをかばっていることが誰かにばれて、連れてかれた・・・としか考えれない」

「じゃあ、助けに行かなきゃ」

紗由は言ってから、はっとした。前の自分だったら、きっとこんなことは言えなかっただろう。異世界に来て、なんだか肝が据わってしまったようだ。自分でも不思議な気持ちだった。

が、メルはその言葉を一蹴した。まるで、浅はかだというように。

「それは無理でしょ。紗由と僕で何が出来ると思う？行っても見つかるのがおちだと思うよ」

「で、でも私とメルのせいでしょ？フェリイが捕まったのって。メルは——助けようって思わないの？」

メルが平然としたまま、紗由に一瞥をくれた。その瞳に浮かんだ感情が何なのかは、紗由には分からなかった。メルは言葉を続けた。

「僕たちに、助ける義理はないと思う。ていうか、僕まで巻き込まないでよ。行きたいなら、一人で行けば？」

その口調にかつと頭に血が上るのを感じた。メルの表情から見ても、完全に他人事だと思ってることが分かった。紗由はそのことに

怒りと同時に、なぜか一縷の悲しみを覚えた。

紗由はきつとメルを睨み付け、肩を怒らせて部屋へ続く階段を上がる。取っ手に手をかけてみると、扉は案外あっさりと開いた。紗由は唇を噛み締めたまま、一度も振り返らずに部屋を出て行った。

14 商人の会話

玄関の前に来た紗由は思わずはっとして立ち止まった。玄関に飾られていたらしい野花の入った花瓶は粉々に碎け、水を飛び散らせていた。近くにあった壁掛けの鏡も割られて、床には無数の破片が転がっている。

「何があつたんだろ・・・」

揉めたような後を見て、紗由は言葉を失くした。フェリイにいたい何があつたのだろうか？まさか——あの男たちに連れ去られた？嫌な想像をかき消すように、乱暴気味に戸を開ける。ここはどうやら丘の上らしく、この家はなだらかな坂の上にあるようだった。辺りは草原が広がっており、人影は全くない。

紗由はすぐ近くの町に続く小道を見つめた。たくさん的小柄な建物が並ぶその町の奥には、城がそびえたっている。遠目にも、その城は古く、蔦がいくつも絡み付いているのが分かった。城壁が無いのは平和な証拠だろうか。

紗由は城を見据えた。なんとなく、フェリイはあの城に居る——勘だが、そんな気がした。

町を通ろうかと思つた紗由は、町に出入りするシーリーたちを見て思い直した。ここにはシーリーしかおらず、人間が通ればさぞ目立つだろう。下手をすれば殺される・・・かもしれない。

紗由は町へ行くことを諦め、町の外をぐるりと回っていくことにした。

町の入り口には『トランの町』と書かれた立派な立て札があつた。

土地勘のない紗由にはここがどこかさっぱり分からないが、どうやら城下町らしいことは見て取れる。ふと疑問が浮かんた。そういえば、フェリイはなぜ町から離れた場所に住んでいたのだろうか――。疑問を幾つも抱えて悶々としながら歩いていると、誰かの話し声が聞こえてきた。紗由ははっとして、慌てて周りを見渡すと近くの茂みにもぐりこみ、身を隠した。

わき道で立ち止まって会話していたのは、二人組みの男だった。背にどつさりと商売道具を背負い、商人のような格好をしている。シーリーの特徴なのか、小柄で体に幾つもの光を纏っていた。

この町には商売のために来たようだ。会話から察するに、二人は久々に会った商売仲間らしい。取りとめのない近況や昔話に花を咲かせている。

早く行つてほしいと願っていた紗由は、もやしのように細い男の口から出た『人間』という言葉にぴくりと反応した。

「これは噂なんだけどき、この町のそばに住んでる女の子がいるの知ってるか？」

「ああ、例の城を追い出された一族の？」

もう一人の太った男が頷く。紗由はそれがフェリイのことだと気づくのには少し時間がかかった。細い男がひそひそと声を潜めたので、紗由は耳をそばだてた。

「その子が人間をかばってたらしいんだ。それであの城に連れてかれたらしい――」

紗由はもうすぐで声を上げるところだった。間違いなく、それは紗由のことに違いない。そして、連れ去られたのも間違いなくフェリイだ。

真っ青になった紗由の存在に全く気づかず、太った男は信じられ

ないと言わんばかりに眉をひそめた。

「まさか。人間がこんなところに来るわけ無いだろ。ただのデマじゃないか、それ」

「でも、この町は今その噂で持ちきりだぞ。お前も入れば分かる」

一人は今出てきたところで、もう一人は今からこの町に入るようだった。だが、紗由はそんな事を気にしてはいなかった。ただ紗由はどうやってあの城に行こうかだけと、頭を巡らしていた。

（メルの魔法があればいいのに・・・）

ふと頭に浮かんだ考えを慌てて振り払い、紗由はしゃがんだまま城を睨んだ。男たちが去っていくのを確認した後、そつとその場を後にした。

14 商人の会話（後書き）

今回は紗由視点でした。三点リーダ、最近存在を知ったんですが、今さら変えてもいいんでしょうかね・・・。

15 獅子の門番（前書き）

今回は長いです。

15 獅子の門番

紗由が城へ向かおうとしていた頃。メルは真つ暗な地下室でうろ
うろ、がさごそと音を立てて、そこらを歩いたり探ったりしていた。

「あー暇だー」

メルは文句を言いながら、近くの袋をつまらなさそうに蹴った。
その独り言と、蹴った時の鈍い音が地下室にむなしく響いた。

ふと、見逃してしまいそうな小さい布の袋が、大きい袋と袋の間に
転がっているのを見つけた。

「なんだ、これ？」

仕方がないが見てやろう、という態度でメルはその袋を爪に引っ
掛けてひょいっと持ち上げる。だが、それは意外に重く、腕にずっ
しりとその重さが伝わってきた。

「・・・？」

不思議に思い、メルは爪で器用に袋の紐を引っ張り、中のものを
取り出した。中から出てきたのは、魔獣の形をしたメルの頭ほどの
大きさの小さい石像だった。猫であるメルには、暗闇でもその顔が
はっきりと見えた。気のせいかな、その顔には苦渋が満ちているよう
に思える。

メルはもしやと思い、そつと像の表面を肉球で撫でながらぶつぶ
つと何かを唱え始めた。すると、ぴしりとひびが入り、像は粉々に
砕け散った。

ゆらり、とメルの目の前に大きな影が現れた。

一方、その頃の紗由は町の周りの森をなんとか抜けて、城の側まで来ていた。城は遠目で見たとおり、太い蔦が薄汚れた外壁に絡まりついていた。それらは人気の無さに加えて、不気味な雰囲気を一層醸しだしており、まるで侵入を拒まれているかのような錯覚に陥らせた。紗由はその雰囲気に飲み込まれそうになり、無意識に一步後ずさった。

（なんか、帰りたくなって来た・・・）

じわじわと不安がこみ上げてきたが、フェリイのことを思うとそれもできない。同時に、気づく。今の自分には、帰れるところなどないことに。

紗由は急に弱気になった自分を自嘲したい気分だったが、大きくため息を吐くだけにとどめた。そして、意を決したように高くそびえ立つ城を見上げると、一步を踏み出した。

城の周りは水掘で囲まれていた。水中では奇妙な形をした魚らしき生き物たちが泳いでいる。

頑丈そうな城門の前には、跳ね橋が架けられていた。紗由はためらっていると気がくじけそうで、足早に橋を渡った。渡った方がいいが、紗由は自分の身長の上三倍以上はありそうな門を見て、ぴたりと足を止めた。明らかに、この城門を開けることは不可能だろう。

とりあえずどうしようかと考え込んでみたが、何も思い浮かばなかった。なぜか、いつものように冷静に物事が考えれず、紗由は途方に暮れた。

「お前、何者だ？」

突然、どこからか聞こえてきた洪い声に紗由は文字通り飛び上がった。慌ててきよろきよろと辺りを見渡すが、相変わらず人気は無く、猫一匹いない。

幻聴か、と思い直した紗由の耳にまた同じ声が届いた。

「こら！無視をするな！」

「ええっ・・・だ、誰ですか？というか、どこ？」

怒ったような声に、紗由は驚きながらもどこからかする声に尋ねた。ふと、門の両端に置かれた一對の獅子の石像が目に入るが、すぐに視線は外れた。直後に、同じ声がこちらに飛んでくる。

「今、見たではないか！！」

「え？まさか・・・これが喋ってるの？」

紗由は目を丸くして、自分と同じぐらいの高さにある台の上の獅子をまじまじと見つめると、その鼻を指先で軽くつついた。

「気安く触るな、ばか者！」

「ご、ごめんなさい」

つついた途端、叱られた紗由は反射的に謝ってしまった。すぐにつついたぐらいで怒られる理不尽さに気づいたが、また怒られそうなので文句をいうのは止めた。

獅子は気を取り直したように咳払いをすると、再度問いかけてきた。

「我は、この城の門番だ。もう一度聞くが、お前は何者だ？シーリ―ではないな」

「見ての通り、人間ですけど・・・」

紗由はそういった瞬間、獅子の眉がしかめられたような気がした。もちろん、石なのでそんなことは不可能だが。

「人間？人間がこの国に入れるはずがない」

「え？でも竜巻に巻き込まれて、気がついたら入ってましたけど」

「・・・妖精とともにきたのだな？」

なぜ分かったのかと驚きつつ、その言葉に肯定する。獅子の姿をした門番はやはりな、とつぶやいた。その言葉は先ほどの事務的なものとは違い、少し柔らかい口調になっているように思えた。

「それで、お前は何の目的でこの城へきたのだ？」

紗由はようやく本来の目的を思い出し、慌てながらも簡単に説明をし始めた。竜巻に巻き込まれた後、ただいま喧嘩中の子猫と自分がシーリーの女の子に助けられたこと。その女の子が二人組みの男に連れ去られたこと（これは推測であるが）。

黙って聞いていた門番だが、途中で呆れたような声で話を遮った。

「それで、その娘とやらを助けにきたのか？お前、馬鹿だろう」

「ば、馬鹿・・・？」

断定する口調に紗由は返す言葉もない。確かに、冷静になってみれば自分は相当馬鹿だろう。こんな不気味な城に、一人で乗り込むうとしているのだから。

気力がそがれた紗由は肩を落とした。途方にくれていると、門番がわざとらしく咳払いをした。

「・・・その娘のことだが、先ほどここを通っていったぞ」
「え」

知っていたのか。紗由はなぜ教えてくれなかったのかと非難の視線を一瞬向けるが、ここが門だったことをすぐに思いだした。
紗由はずいっと門番に詰め寄った。

「それで・・・どこに行つたとか、分かります？」
「こら、話は最後まで聞け」

また、ぐっと門番の眉がしかめられた様な気がした。紗由はきちんと口を閉じる。なぜか、門番がどこか戸惑っているような気がしてならなかったのだ。

「——その娘、この城に自分から入っていったのだが・・・」

15 獅子の門番（後書き）

メルのイメージは5、6ヶ月ぐらい？（今さらですが・・・）

追記：書きかけを投稿してしまいました。その上、勝手に非公開に
してしまい、申し訳ありません。

これからも精進いたしますので、よろしくお願いします。

16 フェリイの正体

——どうということだろうか？

城内に入った紗由は歩きながら考え込んでいた。自分から城に入っていた——その意味が分からない。紗由が今歩いている廊下には、まるで誰かがつけたかのように仄暗いろうそくがいくつも灯されていたが、そんなことにさえ気が回らないくらい紗由は自分の世界にふけっていた。

気がつけば急ぎ足になっていた。いくら周りを見る余裕はないとはいえ、そこここに漂う不気味な雰囲気を感じていると妙に不安になってくる。心なしか、誰かに見られている気がする——・・・。

紗由は回れ右して帰りたい気持ちを抑え、不安を振り払おうと頭を振った。無意識に、紗由は駆け出していた。大理石の床が、紗由を追いかけるかのように足音を反響させた。

どこまでも続いているようにみえた廊下は、途中で大きな扉によって遮断されていた。息を切らして扉の前に立つ。

（フェリイはこの中にいるかもしれない・・・）

微かな希望を抱いて、紗由は重い扉を必死に押し始めた。

「遅かったですね、紗由さん」

中は大広間だった。そして、天井には今にも落ちそうな古びたシ

ヤンデリアが吊り下げられていた。そこから唐突に聞いたことのある声が出て、紗由ははっと天井を見上げた。

「フェリイ……どうということなの？」

穏やかな顔でこちらを見下ろす少女に、紗由は戸惑いと――微かな疑惑を込めて尋ねた。フェリイは何かを隠している。なんだから、そう思えて仕方が無かった。

「どうもこうも、私は目的があつてここに来ただけですよ。それには、紗由さんの力が必要なんですけどね」

紗由は冷や汗が背中を伝うのを感じた。嫌な予感がじわじわとしてくる。フェリイが何者で、何をしようとしているのか、全く分からない。だが、それは決して紗由にとつていいことではないだろう。むしろ、最悪といつてもいいかもしれない。

「正直、これ以上時間を無駄にしたくないですし……。さつさとはじめましょうか」

そういつて微笑んだフェリイに何を、とは聞けなかった。紗由は躊躇した。この場から逃げ出すべきか――それとも、本当のことを知るために質問を続けるか。

後者を選ぶなんて馬鹿にも程がある。そう思つても、紗由はどうしても聞きたくて口を開いた。

「さっきの男たちは誰だったの？ てつきり連れ去られたかと思つたのに」

「質問が多いですね……。まあ、いいですけど。あいつらは政府の下っ端ですよ。油断してたので、気絶はさせられましたけど、も

う二度と会わないと思います。紗由さんたちのこと、探してたみたいですが、あんなやつらに奪われるわけにはいきませんものね」

フェリイはそこで一息つくと、側にあつた鳥かごを引き寄せた。中に入っているのは、真つ赤な光に包まれたひな鳥だった。尾の先では炎が火の粉を飛ばして燃えていた。

「これ、炎鳥っていうんです。『アグロス』を呼ぶのに使えるんですよ」

耳慣れない単語に眉をしかめた紗由をよそに、フェリイは炎鳥の尾を軽く引つ張った。すると、驚いたように炎鳥が鋭い、空気を裂くような声で鳴いた。

紗由は次の瞬間、すさまじい地響きを感じた。

「な・・・あなた、何したの!？」

「これは復讐なんです。私たち一族をここから追い出し、両親を殺したやつらへの――。それを止めなかったこの国のシーリーたちも死んで当然だと思いませんか？」

青ざめた紗由に、フェリイが乾いた笑いを上げた。そこに深い空虚を感じて、紗由はぞわりと肌が粟立たせた。きつと、過去にあったことのせいで、こころのどこかが抜け落ちてしまっているのだ――。

紗由は仄暗い大広間を見渡した。何かに見られている。威圧的なほどの気配もある。なのに、姿が見えない。一体、フェリイは何を呼んだのだろうか――。

逃げないか、と思うが体が動かない。だが、すぐに思い直した。違う。動かないのは――。

「生贄をどうぞ、『アグロス』様」

紗由が足元を見たのと、フェリイが楽しそうに告げたのはほぼ同時だった。

16 フェリイの正体（後書き）

話数、やばいことになるかもしれません・・・。
ていうか、自分でも驚きの展開になってきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5748p/>

屋根裏部屋から異世界へ

2011年11月14日00時11分発行